

家族に関連するストレスフルな体験，及びその適応過程の 研究の概観

筑波大学大学院人間総合科学学術院 新津 寛樹

筑波大学人間系 杉江 征

A research review of stressful family-related experiences and adaptative processes

Hiroki Niitsu (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Masashi Sugie (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

It is generally claimed within both developmental and family psychology that families support their children and facilitate their development. However, families sometimes create social issues, such as child abuse, causing many individuals to suffer. Still, there are individuals who are able to overcome such stressful experiences. The purpose of this study is to review research that has focused on stressful family-related events, the individuals involved and their adaptative strategies. First, we review experiences of child adversity and child abuse as typical examples. Second, we review adaptative strategies by selecting examples of meaning making and posttraumatic growth. Third, we review studies of adaptation that have focused on stressful family-related events. Finally, we discuss the need for more studies to examine adaptive strategies for coping with stressful family-related events as a direction for future research.

Key words: meaning making process, posttraumatic growth, stressful life experiences, stressful family-related experiences

はじめに

家族は情緒的癒し，甘えの源泉でもあれば，たとえば社会化や教育のためにこの自由や意思を制限する場でもある（平木他，2019）。自立へ向かう青年期に入ると，子は今まで価値観や判断の基準としていた親からの分離をめぐって，親子間で対立・葛藤を生じさせながら親子関係の再構築がなされていく（藤原・伊藤，2017）。通常はそこで，様々な情動や葛藤を受けとめ悩むことによって成長する（福森・小川，2009）。

このような「子どもの発達や自己形成における親，及び家族の密接な関係と影響」は発達心理学や家族心理学をはじめとする様々な学術分野において，知

見が積み重ねられてきた。しかしながら，そんな重要な親，家族をきっかけとするストレスフルな体験にさらされる子ども達，その苦しみを背負って大人になった者達がいる。この「親，家族をきっかけとするストレスフルな体験」は，様々な要因が複雑に絡んで，児童虐待をはじめとする問題として発現し，関連する問題をさらに引き起こす。昨今はニュースなどのメディアを通して，多く散見されるものであり，我々の記憶に新しいものではない。

一方で，ストレスフルな体験を乗り越えて，今を幸せに生きる人がいることも確認されており，当事者の歩んできた過程や，それを支えているパーソナリティ等が研究されつつある。

本論文では，こうした家族に関連したストレスフ

ルな体験と、それを乗り越えるという事象に焦点をあてて、以下の手続きを行う。まず、家族に関連するストレスフルな体験が、経験した当事者にとってどんな影響があるのかを検討し、社会問題として顕在化している関連する問題とその情勢の概観することで、今後の検討の重要性を再確認する。次にこういったストレスフルな体験の適応全般、及び家族に関連するストレスフルな体験の適応の研究について概観し、当事者のための今後の有効な支援に必要な課題と展望を述べる。

今日 SDGs が提言され、社会問題に対する地球規模での解決へ向けて、国家や機関が動き出している。本論文は SDGs の中でも 3「保険」(公益財団法人地球環境戦略研究機関 (IGES), 2022) の 3d「すべての国々、特に開発途上国の国家・世界規模な健康危険因子の早期警告、危険因子緩和及び危険因子管理のための能力を強化する。」、16「平和」(公益財団法人地球環境戦略研究機関 (IGES), 2022) の 16.1「あらゆる場所において、すべての形態の暴力および暴力に関連する死亡率を大幅に減少させる。」、16.2「子どもに対する虐待、搾取、人身売買およびあらゆる形態の暴力および拷問を撲滅する。」の達成に向けて大きく寄与するものである。

ストレスフルな体験

家族に関連するストレスフルな体験について概観していくにあたり、まず堀田・杉江 (2015) を取り上げる。堀田・杉江 (2015) は、ストレスフルな体験に相当する重大なネガティブ体験について、大学生を対象に自由記述による探索的検討を行っている。この研究では、これまでの人生で経験した重大なネガティブ体験として学業・進路、人間関係、部活動・スポーツ、喪失、災害、犯罪被害が抽出されたことが報告されている。特に「第一志望の大学に落ちる」や勉強、就活などの学業・進路 (出現率 38.1%) と、失恋、友人関係、家族関係の不和、離別などの人間関係 (出現率 30.7%) が多く抽出されていた。これより、ストレスフルな体験には様々な種類が存在し、我々の身近なものであることがわかる。

家族に関連するストレスフルな体験

堀田・杉江 (2015) において、人間関係に含有される形で抽出された家族関係の不和や離別は、経済的・身体的・人間関係等のストレスが親と子の心身の機能に影響し (中澤, 2012)、家族が機能不全に陥った時に生じる。そして独自の状況が絡むことで、

親や保護者側からの不適切な養育、接し方が生まれた場合、児童虐待が起きる。児童虐待は子ども側にとっての強く長く続くストレス、逆境、不利な状況とされるものの典型 (仁平, 2011) である。厚生労働省 (2000) によると、児童虐待は 4 つに区分されており、定義は以下の通りである。

- 一、児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。
- 二、児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること。
- 三、児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置、保護者以外の同居人による前二号又は次号に掲げる行為と同様の行為の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ること。
- 四、児童に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力 (配偶者 (婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。) の身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすもの及びこれに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動をいう。) その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。

一が身体的虐待、二が性的虐待、三がネグレクト、四が心理的虐待である。古荘・磯崎 (2015) はさらに、代理ミュンヒハウゼン症候群 (Munchausen syndrome by proxy = MSBP) を医療虐待として解釈し、教育虐待と教育ネグレクトを加えて、児童虐待全体を整理している。代理ミュンヒハウゼン症候群とは南部 (2002) によると、他者の健康を故意に損ねる行為や積極的に他者の生命を危険にさらすといった危険な行為を行うことである。教育虐待と教育ネグレクトについては古荘・磯崎 (2015) が、子どもに直接的に教育指導をする親や教師などから、子どもが受ける、一次的あるいは二次的な有害事象として定義し、さらにその中で必要な行為をしてもらえないことと定義した。

以上の身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待、医療虐待、教育虐待、教育ネグレクトについて、虐待を「子どもの側から判断した時、有害な行為をされること」、ネグレクトを「子どもの側から判断した時、必要な行為をしてもらえないこと」として 2 点でまとめている。

これらのことから、児童虐待は、虐待を行う者の側ではなく、受けた者の側から判断した時、有害な行為を受ける、または必要な行為をしてもらえない

ことであることが分かる。

さらに、子どもの **well-being** への影響も加味して検討している研究も存在する。馬場 (2015) は概念分析を通して、児童虐待を「養育者から子どもへの一方的な支配関係から成る、養育者の自覚の有無に関係しない行為による子どもの状況を基盤とした、子どもの **well-being** を害する行為、及び子どもの **well-being** を保つ行為の欠如である」と定義した。

では、児童虐待を受けたものはどのような影響を受けるのであろうか。身体的影響から概観する。友田 (2016) は、ハーバード大学との共同研究により、被虐待児が背負うストレスの脳への影響を検討し、以下の知見を見出した。まず、性的虐待を受けた者や両親の家庭内暴力 (Domestic Violence : DV) を目撃した者は、大脳皮質の後頭葉にある視覚野の容積が18%減少していることを明らかにした。友田 (2016) はこのことから性的虐待被害者は詳細な映像を見なくてもいいように無意識のうちに適応しようとしている可能性を考察した。

また、厳格な体罰を受けた人の脳内では、右前頭前野内側部の容積が平均19.1%減少し、右前帯状回に16.9%の容積減少が見られ、左前頭前野背外側部も14.5%減少していたことが明らかになった。

さらに、複数のタイプの虐待を受けた者は、脳へのダメージも複雑になり、深刻化する。

児童虐待は身体的影響だけではなく、認知などの心理的指標への影響や精神疾患の生起にも関連する。黒崎・田中・江原・清水 (2013) は症状として、外傷後ストレス障害 (PTSD) や抑うつ、注意欠陥多動性障害 (ADHD) や自閉症性スペクトラム障害 (ASD) に類似した反応性愛着障害、解離性障害などの心理的・精神的問題と、行為障害や非行、自傷行為、触法行為などの行動上の問題に加え、学習行動の問題といった学習上の問題をあげている。Lochner et al. (2010) は虐待のような小児期のトラウマと成人後の社交不安障害やパニック障害との関連を示唆した。

安部 (2005) は臨床像として、神経症症状、ヒステリー症状といった身体的影響、思考の欠如や極端な知的機能の低下のような知的・認知的発達への影響、うつや人間関係の回避のような行動・情緒・性格形成への影響の3点からまとめて、境界性人格障害の者子ども時代に虐待被害があった可能性を推察している。

以上のように児童虐待は様々なネガティブな影響を及ぼす。今日明白となっている虐待が連鎖してしまうという可能性を含め、これらについて総合すると、仁平 (2011) の言及している「児童虐待は、子

どもから自信や能力、抛り所を奪い、憎しみ、悲しみといったネガティブな感情を生起させ、自己や世界への嫌悪を生み出す源になってしまうことに最大の罪がある。」が児童虐待の何たるかを言い表している。

児童虐待は日本において大きな社会問題となっている。厚生労働省 (2019) によると平成30年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数は159850件にもほり、平成2年から増加傾向にある。この値は相談対応件数という認知件数である。そのため、認知件数に対して目に見えていない、実際に虐待が起きている件数はさらに多いことが予測できる。

一方、法務省 (2020) では、児童虐待に係る事件の検挙件数と検挙人員の推移を報告している。令和元年の事件の検挙件数は1972件、検挙人員は2024人である。概算で1ヶ月に160人以上が検挙されているということになる。また、児童虐待相談対応件数と同様に増加傾向にあり、特に前年度に比べて検挙件数、検挙人員ともに40%以上も増大している。

子どもが経験する、家族に関連するストレスフルな体験の代表的な例として挙げられる児童虐待を概観してきたが、この子どもが経験する家族に関連するストレスフルな体験をまとめた概念が存在する。それが逆境的小児期体験 (Adverse Childhood Experience: ACE) (谷地, 2020) である。これは小児期におきた逆境的な体験のことであり、Felitti et al. (1998) の ACE 研究において検討されている。Felitti et al. (1998) は ACE を身体的虐待、心理的虐待、性的虐待の虐待3点とアルコールや薬物の物質依存、自殺に関連するものを含む精神疾患、暴力的にあしらわれる母親・継母の存在、家庭内の者が投獄されたことがあるかどうかの家庭の機能不全4点から検討している。ここで挙げられた概念、または ACE 全体から受ける影響についても検討されている。Díez et al. (2017) は、小児期に DV にさらされることで、青年期に重大なネガティブな影響を受けることを明らかにしている。McLeod et al. (2014) は、小児期の身体的な体罰や虐待にさらされることが増加することと、以降のネガティブなパートナー関係、パートナーの社会適応に関する問題、親密なパートナーへの暴力による被害とその認知の4点の間の関連を見出している。Ko et al. (2011) では、調査協力者のうち、虐待・ネグレクトと夫婦間暴力の認知の両方を経験した者は自尊感情が低く、高い割合で攻撃的、暴力的になる、あるいは貶められていると感じることを報告していた。さらにこの者たちは **well-being** が貶められ、親の暴力やしつけは自身のせいであると感じていた。Kaslow and Thompson

(2008)は、虐待を経験した子ども、及び母が親密なパートナーから身体的な暴力を受けた経験を有する子どもは強い心理的苦痛を経験していたことを報告している。

一方、Lamers-Winkelmann et al. (2009)によると、夫婦間暴力を目撃した子どもは、他のACEにもさらされていることが報告されている。これより、ACEに含まれる概念のうちの1つを経験していた場合、他のACEの構成要素も経験している可能性を念頭に置いておく必要がある。また、Roustit et al. (2009)が、小児期に夫婦間暴力にさらされた成人は、抑うつ、パートナーを支配しようとする行為、児童虐待、アルコール依存といった心理的不適応に陥るリスクが高いことを報告していることから、児童虐待の連鎖の可能性のように、ACEとは他のACEの原因となり、負のスパイラルを生む可能性がある。

ACEに内包されている児童虐待は「ACOD」という概念の日本における普及の契機となった。「ACOD」は「機能不全家族におけるアダルトチルドレン：Adult Children Of Dysfunctional family」の略称のことである。アダルトチルドレンとは機能不全に陥った家族の中で育ち、幼少期において不適切な養育のもと、性格、人格、対人関係に障害をきたした人々のことである(千葉・小林, 2003)。元々は、アメリカの臨床の現場で生まれた「Adult Children Of Alcoholics (アルコール依存症の親のもとで育ち、成長した人)：ACOA」という用語に由来する(信田, 2001)。現在はアルコール依存症に起因する家族の問題に限定せず、様々なタイプの家族の問題に起因する機能不全家族の中で生じた家庭内トラウマの犠牲者として捉えられている。特徴としてはself-esteem(自己評価・自尊心)の低さが挙げられている(千葉・小林, 2003)。

ストレスフルな体験の適応の概念の台頭

近年、ポジティブ心理学における「ネガティブな部分だけでなく、ポジティブな部分やアドバンテージにも目を向ける」という視点や、パーソンセンタードアプローチの自己実現傾向を基盤として、人間の適応に関する研究が積み重ねられつつある。なかでも、機能、プロセス、隣接概念との関連等について、積極的に検討がされている概念に「意味づけ」というものがある。これはストレスフルな体験を経験した後の適応過程のことである。

Park (2010)は既存の意味づけの研究を概観し、土台となるThe meaning making modelを提唱した。このモデルは、global meaning(包括的な意味)と

ストレスフルな体験を経験した時に行われるsituational meaning(状況の意味づけ)の2つで構成されている。このモデルによると、意味づけは以下のような手順で行われる。まず、ストレスフルな体験を経験した人は、その出来事の意味の評価を行う。この評価とは包括的な意味との比較を指す。ここで不一致が生じなかった場合、ストレスフルな体験に適応したことになり、意味づけが生起することはない。もし、差異が生まれた場合、meaning making process(意味づけの過程)へと進む。この部分を完了することで、meaning made(生成された意味)が生まれる。ここで生まれた、生成された意味が、包括的な意味の新たな部分として追加されたり、包括的な意味を新たに改変したりする。この一連の流れを総じてsituational meaning(状況の意味づけ)と呼ぶ。global meaning(包括的な意味)とは、個人が信念や目標等(Reker and Wong, 1968)としてすでに持っている感覚で、人生初期において形成されるが、経験をもとに修正されるとされている(Austin and Vancouver, 1996)。meaning making process(意味づけの過程)とは、包括的な意味とストレスフルな体験の評価との間で不一致が起きた場合、不一致を減少、解消する(堀田, 2016)行程である。meaning made(生成された意味)とは意味づけの過程を通じた変化や産物である(Park, 2010)。

意味づけの研究の傾向としては何に意味づけしたのかを取り扱う生成された意味についての研究から、どう意味づけしたのかを取り扱う意味づけの過程の研究を中心に行うようになった(堀田・杉江, 2012)。

意味づけの過程に関しては同化、調節、意味の付与といった概念が検討されてきた(Park, 2010; 堀田・杉江, 2013; 宅, 2010)。なかでも同化と調節はJoseph and Linly (2005)が有機体価値理論を提唱したことを皮切りに、機能についての多くの研究が積み重ねられてきており、堀田・杉江(2013)により尺度が開発され、より実証的な検討が可能となった。

同化とは自身が持つ物事の見方や考え方に一致するようにその体験を解釈、了解することである(堀田・杉江, 2013)。同化を通じた意味づけは、成長感や人生や周囲に対する感謝は感じにくいものの、ストレスフルな出来事を体験したことによるネガティブな影響も抑えることが出来ることが報告されている(堀田・杉江, 2013)。調節とはその体験を理解、解釈するために意識的、意図的な認知、感情的対処を行い、自身が持つ物事の見方や考え方を修正していくことである(堀田・杉江, 2013)。調節を通した

意味づけは、成長感を得られ、ポジティブな変容を導く一方、ネガティブな変容も導くことが報告されている(堀田・杉江, 2013)。ストレスフルな出来事に直面した際、同化と調節は一つの出来事に対して両方とも行われると指摘されている(堀田・杉江, 2013)。加えて、調節を通じた意味づけの過程から得られる、生成された意味の順序性や連続性を捉えることにより意味づけの過程から生成された意味へのプロセスをより詳細に解明できる可能性が示唆されている(堀田・杉江, 2013)。

生成された意味に関しては、最も体系的な検討がなされてきた代表的な概念としてPTGが挙げられている(堀田・杉江, 2013)。1996年、TedeschiとCalhounによりPosttraumatic Growth (PTG: 心的外傷後成長)が提唱された。これは、大変つらい出来事や突然の不幸な出来事に直面した人が、様々なストレスを経験しつつ、苦悩と向き合う中で生じる人としてのこころの成長を表す(宅, 2016)。先述の生成された意味の代表概念である。PTGの用語内に外傷(traumatic)とあるが、これはPTSD症状に準ずるものに限らず、さまざまなライフイベントやストレスフルな体験が含まれている。該当する基準として、いかに主観的に衝撃的な出来事として体験されたかに重点を置くのが特徴である(宅, 2010)。PTGを測定する尺度としては、最初にPosttraumatic Growth Inventory (PTGI: 心的外傷後成長尺度)がTedeschi and Calhoun (1996)により開発された。

PTGIは5因子で構成されており、以下に内容を示す。第1因子は「他者との関係」である。人間関係の在り方や付き合い方が変わるような体験がこの領域のPTGである。他の人とのつながりの中で経験される成長(例えば相手を思いやる気持ちが強くなった等)がこの領域の例である(宅, 2014)。第2因子は「新たな可能性」である。それまで描いていた人生の道筋とは異なる方向性が余儀なくされるがゆえに新しい可能性が開けてくるという内容のPTGである。自分の身に起きたことをきっかけにそれまでは手を取ったこともないような本や雑誌に興味を持ったりするようになる等がこの領域の例である(宅, 2016)。第3因子は「人間としての強さ」である。自分を自分自身がどうとらえるかという自己認知のポジティブな変容を表す。予測し得ないような出来事が自分に起き、それでも今、自分はまだ生きているという現実をふまえ、自分で思っていた以上に自分というのは強い面があると感じることがこの領域の例である(宅, 2016)。第4因子は「精神的な変容」である。スピリチュアルな事柄や人間の力を超えた神秘的な事柄などについて理解がより深まる

ことを表す。生き方や死ぬことについて、思いを巡らせることがこの領域の例である(宅, 2014)。第5因子は「人生に対する感謝」である。出来事が起こる以前は、当然のこととして受け止めていた平凡な毎日や生きていることそのものに対して、改めて感謝の念が生まれるという変化がこの領域の成長である(宅, 2014)。

現在は最新版の日本版心的外傷後成長尺度拡張版(Japanese Posttraumatic Growth Inventory X:PTGI-X-J)(Tedeschi et al. 2017)が存在する。本尺度はTedeschi et al. (2017)が作成したPosttraumatic Growth Inventory Xの日本語版である。

PTGIの開発により、PTGの測定による量的な検討が可能となった。これをきっかけにさまざまな研究がなされてきた。日本においても、Taku et al. (2007)が日本人大学生に対して調査を行う際、日本語へ翻訳して「日本語版外傷後成長尺度(Japanese Posttraumatic Growth Inventory: PTGI-J)」を作成したことにより活発に研究が行われている(中山他, 2017; 亀田・相良, 2011; 堀田・杉江, 2013; 浦崎・森川, 2019)。

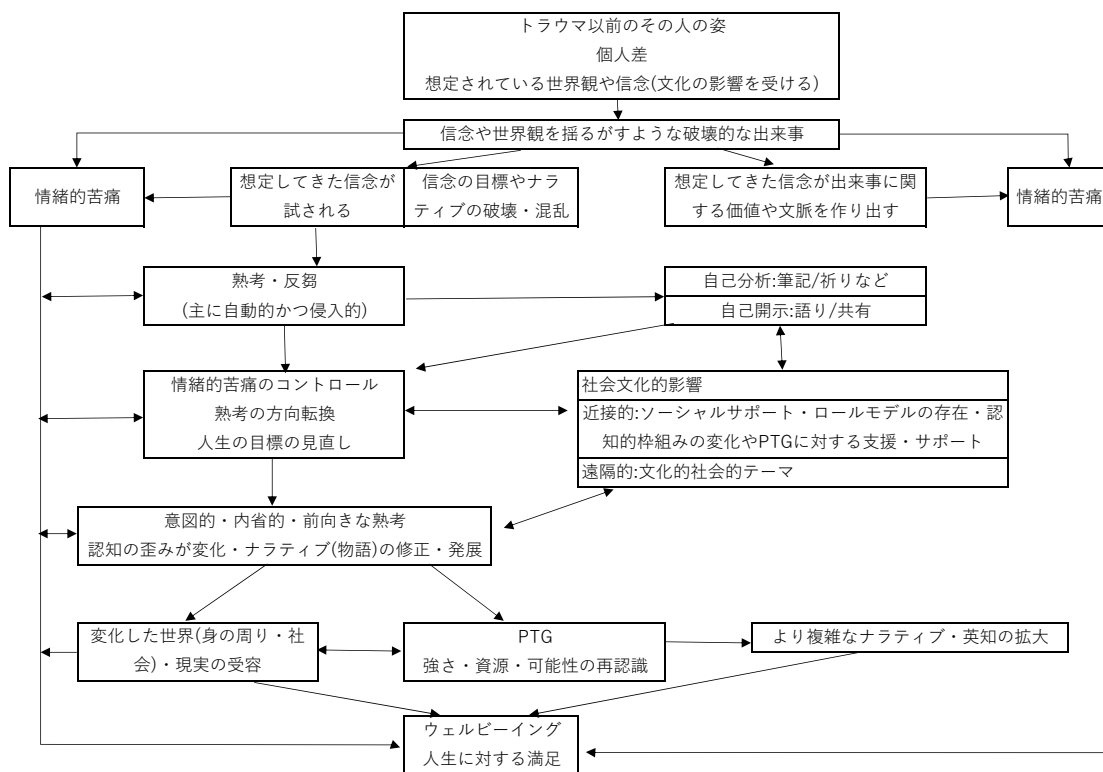
PTGの生起過程については、Calhoun et al. (2010)が理論モデル(Figure1)を提唱している。このモデルでは、まず、信念や世界観を揺るがすような破壊的な出来事が起き、PTG生起への最初のきっかけとなる。その後、情緒的苦痛が起きる。この時、想定してきた信念が試される。次に情緒的苦痛を和らげるために、自動的かつ侵入的な熟考や反芻が生じる。しかしながら、自己分析や自己開示により変動し、周囲のサポート等も影響して情緒的苦痛のコントロールができるようになっていく。この時、自身の属する社会や文化による影響も受ける。そして意図的で適応的な熟考が可能となり、認知のゆがみの変化や自身の物語の変化が起きてPTGが生起する。最終的に自身のウェルビーイングや人生に対する満足が得られる。この理論モデルは数多くの研究から支持されている(浦崎・森川, 2019; 上條・湯川, 2016; 下釜, 2020)。

先ほどPark (2010)の統合的な意味づけモデルにおいて、PTGは生成された意味に相当する点について言及した。一方でPTGの理論モデルにおいても「意図的・内省的・前向きな熟考」が意味づけに相当するとされている。

この点については、検討するストレスフルな体験の特徴や研究対象の当事者に応じて、最適な概念を当てはめるか創生することで、支援に有用な知見を生み出すことが重要である。

PTGと近似する概念としてレジリエンス

Figure1 PTGの理論モデル (Calhoun et al. 2010) を宅 (2016) が翻訳



(Resilience) もまた、盛んに研究されている。レジリエンスとは、心理的ホメオスタシス (psychological homeostasis) として、ストレスに曝露されても心理的な健康状態を維持する力、あるいは一時的に不適応状態に陥ったとしても、それを乗り越え健康な状態へ回復していく力である (齊藤・岡安, 2009)。PTG とレジリエンスの違いに関して飯村 (2017) は以下のように論じている。レジリエンスは元の機能レベルへ戻るといふプロセスであるが、PTG は元の機能レベルへ戻るといふプロセスの先に、元の機能レベル以上の変化 (成長) が起こる。そのため、ストレス経験後のプロセスとしては2つの概念は部分的に重なるといえる。

家族に関連するストレスフルな体験の適応の研究

では、最初に取り上げた児童虐待のような、家族に関連するストレスフルな体験の適応の研究はどのようなものがあるのだろうか。

まずは児童虐待の被害者の適応過程に焦点を当てたものを取り上げる。藤野 (2010) は、被虐待経験のある女性を対象に当事者の目線からどのように被

虐待経験を乗り越えたのかを質的に検討している。藤野 (2010) によると、虐待を受けた当事者は、受けた行為が不当であると気づき、受身者のままでいることから脱却しようと試みる。虐待への恐怖心が減少するにつれて、なぜ虐待が起きたかを理解しようとし洞察を深める。

また井上・笹倉 (2017) は、児童期に性的虐待を受けた女性の語りから自己回復力を明らかにした。井上・笹倉 (2017) によるとこの女性の語りは過去の出来事をその時々「現在」の地点から語り直し、異なる意味づけを併存させたままライフストーリーを構築していた。井上・笹倉 (2017) はこの行為について、ライフストーリーを継続的な語り直しの可能性に開かれたものにする意味があったと考察している。

一方で PTG からアプローチした研究に関しては、以下の研究が挙げられる。

Lev-Wiesel et al. (2005) は被性的虐待体験からの PTG について検討した。その結果、性的虐待を受けた当事者に PTSD と PTG が併存し得ることを明らかにした。これは当事者が心的外傷後ストレスに傷つきつつもそこから成長しようとする可能性を示唆

している。

Hooper et al. (2008) は親子役割の逆転体験からPTGへの予測因子の検討をした。その結果、親子役割の逆転はPTSD等のネガティブ体験のリスク要因となる一方で、PTGの予測要因にもなることが示唆された。さらに情緒の親子役割の逆転体験が非臨床の者達の苦悩の予測要因になり得ることも明らかにした。

Woodward and Joseph (2003) は被虐待経験を持つ人の語りからのPTGの主題の探索的検討を行った。その結果、人生への熱意、立ち向かう心、決意といった生きる意志、自分の正当性の自認や受容、自由の認識といった変容、人生の新たな側面の認知へ人間関係の変容、自己認知の変化といった心理学的変化が語りから明らかとなり、PTGの促進に寄与する知見となった。

しかしながら、家族間で起きた問題を取り上げた意味づけの過程について検討した研究は少なく、十分になされているとは言い難い。特に尺度が開発され、研究の自由度が高騰した意味づけやPTGのような概念を用いて、「サバイバーが傷つき、症状等を負った時点から適応（意味づけて対処行動を行うことを含む）し、変容を経て、well-beingを得て今を生きるに至った」プロセスを学際的に検討する研究は進んでいない。

課題と展望

これまで家族に関連するストレスフルな体験、当事者への影響が、関連する問題とその情勢、ストレスフルな体験の適応全般、及び家族に関連するストレスフルな体験に焦点を当てた研究について概観した。

先行研究を整理すると、多くの人々が、児童虐待をはじめとする、軽度から重度にわたる家族関係における様々な諸問題を契機とする葛藤体験に傷ついていることは明白であり（厚生労働省, 2019; 法務省, 2020; 堀田・杉江, 2015）、そこから適応する人々もまた、確かに存在することが明らかになった（藤野, 2010; 井上・笹倉, 2017）。

そして、適応過程の概念の尺度が開発され（堀田・杉江, 2013; Tedeschi and Calhoun, 1996）、同化や調節を通した意味づけが成長感を促進する（堀田・杉江, 2013）ことが明らかになった。これらを踏まえて、最後に今後の課題と展望について言及する。

家族に関連するストレスフルな体験については、虐待のような典型的なものや小児期に経験したもの

に焦点を当ててまとめたACE (Felitti et al. 1998) が、経験した当事者にどのような影響を及ぼすのか検討されてきた。しかしながら、家族間におけるストレスフルな問題とその葛藤は我々も体験するものであり、軽度のものから重度のものまで様々である。このスペクトラム状に存在するという点を踏まえて検討することで、支援の知見の生成に繋がると考えられる。

適応については、多くの研究が、何かの系統に限定しないストレスフルな体験全体を想定した適応過程の検討を行っており（浦崎・森川, 2019; 下釜, 2020）、知見の一般化に向けて、多様な出来事の種類を行い、想定した検討が求められている（堀田・杉江, 2013）。そのため、家族関係における適応の検討も今日に至るまで、焦点を当てた当事者研究（藤野, 2010; 井上・笹倉, 2017）が行われているが、「サバイバーが傷つき、症状等を負った時点から適応（意味づけて対処行動を行うことを含む）し、変容を経て、well-beingを得て今を生きるに至った」プロセスを学際的に検討する研究は進んでいない。

そのため、適応過程の詳細について、症状に関する生物学的観点、医学や神経科学等を含む知見による検討や、回復後の状態像、適応後の社会復帰や心理的な変容といった観点も踏まえて学際的な検討をすることが求められる。

また、家族に関連するストレスフルな体験の適応過程の確立のその先の包括的な支援の生成へ向けて、教育機関も動いていく必要がある。昨今は「お受験」と遠ざけられてきた中学受験が身近になりつつあり、大学進学一般化が進み、子どもと教育機関が接点を持つことが増加している。そんな中、渡部 (2019) は、大学教育が意図せず、教育虐待、教育ネグレクトになってしまわないように、学生の発達や理解力に配慮して学生主体の教育の考察をしていくことの重要性を訴えた。教育機関は学生相談のような、家族とは別の近い介入支援の窓口として、一方でアイデンティティ確立や後の教養取得、社会適応を支える機関として肝要な役割を持つだろう。

こういった子どもとその家族が抱える問題を適応する過程を明らかにすることは、以降の問題の予防や健康の増幅につながる視座を導くものであり、家族心理学や健康心理学、ポジティブ心理学、臨床心理学の観点からも重要である。さらに、看護学、社会福祉学、保育学等を含む知見によるストレスフルな体験や葛藤を生まない環境づくりのための親への子育て等についてのサポートの検討にも寄与すると考えられる。

引用文献

- 安部計彦 (2005). 児童虐待の心身への影響 心身医学, 45(3), 187-194
- 馬場香里 (2015). 「児童虐待」の概念分析 日本助産学会誌, 29(2), 207-218
- Clare Woodward and Stephen Joseph(2003). Positive change processes and posttraumatic growth in people who have experienced childhood abuse: Understanding vehicles of change Psychology and Psychotherapy: Theory, Research and Practice 76,267-283
- C Lochner, S Seedat, C Allgulander, M Kidd, D Stein and A Gerdner(2010). Childhood trauma in adults with social anxiety disorder and panic disorder: a cross-national study African Journal of Psychiatry 13 376-381
- Cristina Díez, Yolanda Fontanil, Yolanda Alonso, Esteban Ezama, and Laura E. Gómez(2017). Adolescents at Serious Psychosocial Risk: What Is the Role of Additional Exposure to Violence in the Home? Journal of Interpersonal Violence 1-24 tps://doi.org/10.1177/0886260517708762
- C Roustit, E Renahy, G Guernec, S Lesieur, I Parizot, P Chauvin(2009). Exposure to interparental violence and psychosocial maladjustment in the adult life course: advocacy for early prevention Journal of Epidemiol Community Health 63:563-568 doi:10.1136/jech.2008.077750
- Felitti, V. J., Anda, R.F., Nordenberg, D., Williams, D.F., Spitz, A. M., Edwards, V., Koss, M.P., & Marks, J. S. (1998). Relationship of Childhood Abuse and Household Dysfunction to Many of the Leading Causes of Death in Adults. American Preventive Medicine, 245-258
- Francien Lamers-Winkelmann, Agnes M. Willeman and Margreet Visser(2012). Adverse Childhood Experiences of referred children exposed to Intimate Partner Violence: Consequences for their wellbeing Child Abuse & Neglect doi:10.1016/j.chiabu.2011.07.006
- 福森崇貴・小川俊樹 (2009). 青年期における不快情動との直面を促進する要因に関する検討 パーソナリティ研究, 18, 12-20
- 藤原あやの・伊藤 裕子 (2017). 親子の対立・葛藤における青年の反応尺度の作成 カウンセリング研究, 50, 32-40
- 藤野京子 (2010). 児童虐待を受けた女性サバイバーが30歳代に至るまでのプロセス 犯罪心理学研究, 47(2), 33-46
- 古荘純一・磯崎祐介 (2015). 教育虐待・教育ネグレクト 日本の教育システムと親が抱える問題 光文社
- Gary T Reker and Paul T P Wong (1968). Aging as an individual process: Toward a theory of personal meaning Psychological concepts and theories of aging 214-246
- Geraldine F. H. McLeod, David M. Fergusson, and L. John Horwood (2014). Childhood Physical Punishment or Maltreatment and Partnership Outcomes at Age 30 American Journal of Orthopsychiatry 84,3,307-315 DOI: 10.1037/h0099807
- 平木典子・中釜洋子・藤田博康・野末武義 (2019). 家族の心理 第二版, サイエンス社
- 法務省 (2020). 令和2年版 犯罪白書 http://hakusyol.moj.go.jp/jp/67/nfm/n67_2_4_5_1_0.html
- 堀田亮・杉江 征 (2012). ストレスフルな体験の意味づけに関連する研究の動向 筑波大学心理学研究, 44, 113-122
- 堀田亮・杉江 征 (2013). 挫折体験の意味づけが自己概念の変容に与える影響 心理学研究, 84, 408-418
- 堀田亮・杉江 征 (2013). 重大なライフイベントの意味づけに関する尺度の作成——同化・調節の観点から—— 健康心理学研究, 26, 108-118
- 堀田亮・杉江 征 (2015). 大学生における重大なネガティブ体験についての探索的検討 健康心理学研究, 28, 41-46
- 堀田 亮 (2016). 重大なネガティブ体験の意味づけに関する心理学的研究 風間書房
- 飯村周平 (2017). 心的外傷後成長とレジリエンスの曖昧な関係をめぐる議論 日本心理学 会第81回大会 一般研究発表 (ポスター)
- 井上寿美・笹倉千佳弘 (2017). 児童期に性的虐待を受けた女性サバイバーの語りに見る自己回復力教育研究, 43, 1-11
- James T Austin and Jeffery B Vancouver(1996). Goal constructs in psychology : Structure, process and content Psychological Bulletin 120, 338-375 DOI: 10.1037/0033-2909.120.3.338
- 亀田秀子・相良順子 (2011). 過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討——いじめられた体験から自己成長感に至るプ

- ロセスの検討—— カウンセリング研究, 44, 1-11
- 上條菜美子・湯川進太郎 (2016). ストレスフルな体験の意味づけにおける侵襲的熟考と意図的熟考の役割 心理学研究, 86, 513-526. doi.org/10.4992/jipsy.86.14037
- Ko Ling Chan, Douglas A. Brownridge, Elise Yan, Daniel Y. T. Fong, and Agnes Tiwari(2011). Child Maltreatment Polyvictimization: Rates and Short-Term Effects on Adjustment in a Representative Hong Kong Sample Psychology of Violence 1,1,4-15 DOI: 10.1037/a0020284
- 公益財団法人地球環境戦略研究機関 (IGES) (2022). 3. すべての人に健康と福祉を <https://www.iges.or.jp/jp/sdgs/3-good-health-and-well-being>
- 公益財団法人地球環境戦略研究機関 (IGES) (2022). 16. 平和と公正をすべての人に <https://www.iges.or.jp/jp/sdgs/16-peace-justice-and-strong-institutions>
- 厚生労働省 (2000). 児童虐待の防止等に関する法律 平成十二年法律第八十二号
- 厚生労働省 (2019). 平成30年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数 (速報値) https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000190801_00001.html
- 黒崎 碧・田中恭子・江原佳奈・清水俊明 (2013). 被虐待児における認知、行動、情緒機能の特徴についての検討 順天堂醫事雑誌, 59, 490-495
- Lisa M. Hooper, Sylvia A. Marotta, Richard P. Lanthier(2008). Predictors of Growth and Distress Following Childhood Parentification: A Retrospective Exploratory Study Journal of Child and Family Studies 17,693-705 DOI: 10.1007/s10826-007-9184-8
- Nadine J. Kaslowa and Martie P. Thompson(2008). Associations of child maltreatment and intimate partner violence with psychological adjustment among low SES, African American children Child Abuse & Neglect 32 888-896 doi:10.1016/j.chiabu.2007.09.012
- 中澤香織 (2012). 家族構成の変動と家族関係が子ども虐待へ与える影響——母親の家族内における立場に注目して—— 厚生指針, 59, 20-24
- 中山真・橋本 剛・吉田俊和 (2017). 恋愛関係の崩壊によるストレス関連成長 日本パーソナリティ心理学会, 26, 61-75. DOI: <http://doi.org/10.2132/personality.26.1.6>
- 南部さおり (2002). 児童虐待としての「代理人によるミュンヒハウゼン症候群」——社会・医療・司法手続におけるMSBPの問題点—— 犯罪社会学研究, 27, 60-73
- 仁平義明 (2011). 子どもの虐待と心の回復 (レジリエンス) の指標 白鷗大学論集, 26, 363-390
- 信田さよ子 (2001). 子どもの虐待へのアプローチ 教育学研究, 68, 286-295
- Park,C.L. (2010). Making sense of meaning literature: An integrative review of meaning making and its effects on adjustment to stressful life events Psychological Bulletin 136, 257-301. DOI: 10.1037/a0018301
- Rachel Lev-Wiesel, Marianne Amir and Avi Besser(2005). Posttraumatic growth among female survivors of childhood sexual abuse in relation to the perpetrator identity Journal of Loss and Trauma 10, 7-17. <https://doi.org/10.1080/15325020490890606>
- Richard G Tedeschi and Lawrence G Calhoun (1996). The Posttraumatic Growth Inventory : Measuring the Positive Legacy of Trauma Journal of Traumatic Stress 9 455-471.
- Stephen Joseph and P Alex Linley(2005). Growth following adversity:Theoretical perspectives and implications for clinical practice Clinical psychology review 26, 1041- 1053. doi:10.1016/j.cpr.2005.12.006
- 齊藤和貴・岡安孝弘 (2009). 最近のレジリエンス研究の動向と課題 明治大学心理社会学研究, 4, 72-84
- 下釜 稔 (2020). 日本人大学生における過去のストレスフルな体験の意味づけに伴う成長感が現在の人生の意味の実感と対人関係に及ぼす影響——心的外傷後成長のその後 (P - PTG) に着目して—— 2020年度法政大学大学院人間社会研究科臨床心理学専攻修士論文
- Taku, K., Calhoun, L. G., Tedeschi, R. G., Gil-Rivas, V., Kilmer, R. P., and Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. Anxiety Stress, and Coping 20, 353-367. DOI: 10.1080/10615800701295007
- 宅香菜子 (2010). 外傷後成長に関する研究——ストレス体験をきっかけとした青年の変容—— 風間書房
- 宅香菜子 (2014). 悲しみから人が成長するとき-PTG 風間書房.
- 宅香菜子 (2016). PTG の可能性と課題 金子書房
- 谷地ちぐさ (2020). 逆境的小児期体験 (ACE) を有

し抑うつ傾向にある成人に対するタッチングの心理・生理的影響に関する実験的研究 2020年度博士論文, 桜美林大学大学院国際学研究科国際人文社会科学専攻

- Tedeschi R. G., Cann A and Calhoun L. G. (2010). The Posttraumatic Growth Model: Sociocultural Considerations. In Weiss, T. & Berger, R. (Eds), *Posttraumatic growth and culturally competent practice: Lessons learned from around the globe*. 1-14. Hoboken: John Wiley & Sons
- Tedeschi, R. G., Cann, A., Taku, K., Senol Durak, E., & Calhoun, L. G. (2017). The Posttraumatic Growth Inventory: A revision integrating existential and spiritual change. *Journal of Traumatic Stress* 30, 11-18. DOI: 10.1002/

jts.22155

- 千葉有希子・小林厚子 (2003). 家族機能とアダルト・チルドレン的傾向に関する実証的研究 東京成徳大学臨床心理学研究, 3, 5-20
- 友田明美 (2016). 被虐待者の脳科学研究 特集 こども虐待とケア 児童青年精神医学とその近接領域, 57, 719-729
- 浦崎貴大・森川友子 (2019). 過去のストレス体験におけるサポート認知と意味づけおよび外傷後成長との関連 人間科学, 1, 27-37. DOI: 10.32223/hksu.1.0_27
- 渡部真奈美 (2019). 教育虐待, 教育ネグレクトを知っていますか? 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, 5, 35-37
(受稿4月28日: 受理5月17日)